

胡忠正

1. 事業実施の目的

報告者の博士課程における課題は、台湾原住民族ブヌン族の現代社会における狩猟採集文化を人類学的に研究することである。特に、狩猟採集に関わる動植物と人間との相互作用、それらを基盤とした生態知識の体系を明らかにすることが主要な目的である。

今回の調査は、狩猟採集活動に深く関わる「*Malahodaigian* (耳射ち祭)」(以下、耳射ち祭)を参与観察し、祭礼の過程とそれに関わる生態知識のデータの収集を計画して行った。

毎年4、5月頃に、ブヌン族の各集落では、子供が鹿肉を弓矢で射るという儀礼を中心とした耳射ち祭を開催する。耳射ち祭はブヌン族の少年が獵師になる1つの通過儀礼及び児童の無病息災を祈願することを目的として開催される。

耳射ち祭は、肉を弓矢で射る本祭とその準備の大きく2つの段階に分かれている。

準備段階では、祭礼の一週前に、獵師らは *Taisah* (夢占い) を通して、*Hanitu*(精霊)に狩猟の承認をもらった後に、大獵を祈願するための *Pisilai* (銃の祭儀) を行う。それから約一週間、村落から山中に出獵する。女性らは耳射ち祭の一週前に *Davus* (粟酒) を醸して、3日あたりからは粟餅を作り始める。また、儀礼用の月桃や耳射ち祭における食事のサツマイモ、カボチャなどの食べ物を用意する。

耳射ち祭の当日は、獵師らが一つの輪になって、*Pasibutbut*(粟の豊作を祈る歌)、*Malastapang*(手柄を唱える)を唱和し、子どもの無病息災や獵果を祈願する。その後、長老らが中心となり、歩行できるようになった幼児から約12歳までの男の子供らに、弓を使わせて獣肉を射る儀礼行為を行う。

本調査では、台東県の Kamcing 集落、Bulbul 集落、Haitutuan 集落という3つの集落において行われた耳射ち祭を記録し、本祭礼に関わる動植物がブヌン族の狩猟採集文化において、どのような文脈に位置づけられているのかを明らかにする。

近年、台湾では原住民族の権利が社会的に注目されるにしたがって、ブヌン族の狩猟採集に関わる民族生態学的な研究が増加する傾向が見られる(林仁瀚 2004; 曾清峰 2006; 張慧娟 2018)。この中で、注目されているのが耳射ち祭で、祭礼の経緯、ブヌン族の帰属意識と祭礼との関係を中心に論じられてきた(李曉櫻 2010; 陳秀如 2016; 廖哲嘉 2019)。

一方で、耳射ち祭は動植物といった自然資源を生態資源として利用する祭礼である。しかし、これまでに、耳射ち祭における動植物の利用に関する報告はほとんどみられない。また、現代社会における耳射ち祭の文化機能の変容に注目した人類学的な研究はまだ不十分である。今回の調査では、耳射ち祭における動植物の利用に関する知識を確認し、歴史的にどのような変容が生じているのかを検討した。

2. 実施場所

フィールドワークを行った場所は台湾の台東県の Kamcing 集落、Bulbul 集落と Haitutuan 集落である（図1）。

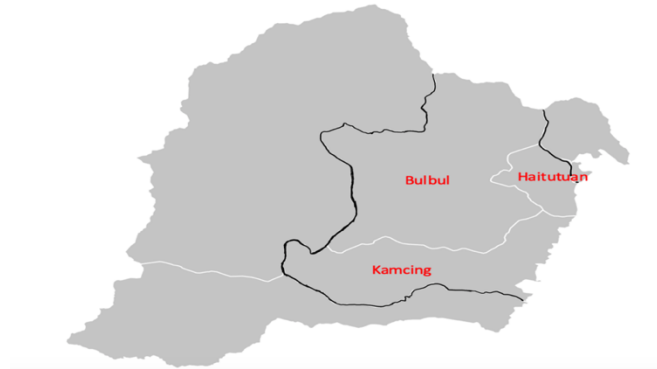


図1：海端郷行政区図¹をもとに報告者作成

周囲を深い山々に囲まれた Kamcing 集落は海拔 300m から 1900m の間にある。面積は約 200km²ほどあり、そのうち半分は森林である。『台灣原住民族集落事典』によると、現在の Kamcing 集落の総人口は 939 人であり、また世帯数は 203 人である。民族分布をみるとブヌン族が郡社群（Isbukun）と巒社群（Takbanuaz）で 82%に達し、他にはアミ族（18%）、プユマ族なども住居している。Kamcing 集落には鉄道の駅が山麓にあるので、他の集落よりもアクセスには便利である。しかしながら近年、鉄道の高速化に伴って、出稼ぎや子供の教育環境を案じて集落を離れることを決める家族が年ごとに増加し、人口の減少は深刻化しつつある。

一方、Haitutuan 集落及び Bulbul 集落は、標高 1000m 以上の山によって囲まれて、奥山の中腹に集落を立地させている。これら 2つの集落の構成員は、Haitutuan 集落、Bulbul 集落ともに 7割以上を高齢者と児童が占めている。Kamcing 集落と同じように、人口流出のうえに、医療資源の不足をはじめ、アルコール依存症などによる人口減少は問題視されている。これら 2つの集落の位置を Kamcing 集落と比較すると漢民族を中心とする町からは相当離れており、中央山脈には比較的近い。

3. 実施期日 2019 年 4 月 19 日（金曜日）～2019 年 5 月 13 日（月曜日）

●事業の概要

現地調査は、2019 年 4 月 19 日から 5 月 13 日の期間に実施した。4 月 20 日に台東県の Kamcing 集落、5 月 4 日に Bulbul 集落、5 月 11 日に Haitutuan 集落で行われた耳射ち祭を

¹ 出所：Map of Haiduan Township, Taitung County, Taiwan. https://zh.wikipedia.org/wiki/海端鄉#/media/File:Haiduan_villages.svg（閲覧:2019 年5月 20 日）

参与観察し、撮影記録を行うとともに、Kamcing 集落を中心に、調査期間中に計 10 人のインフォーマントに聞き取り調査を行った。また Kamcing 集落で行なった聞き取り調査の結果を確認することを目的とし、Knahcian 集落と kusunuki 集落において、80 代の女性を対象に詳細な聞き取り調査を行った。

調査によって得られた知見の概要は以下のようにまとめることができる。

(1) 耳射ち祭における動植物の役割

動物の獣骨は耳射ち祭りにおいて、重要な役割を担っていた。ブヌン族は動物の獣骨（イノシシ、シカ）に向けて粟や酒粕などを投じる。これは、翌年の耳射ち祭の前の狩猟期間に十分な猟果が得られることを祈念するために行われるものである。獣骨に投げるという行為は、猟銃と動物との関係を表象してきた可能性が考えられる。

また、昨年の狩猟で得られたイノシシの下顎骨を祭壇に飾り、月桃の葉で柵の四方を結ぶことによって、「*Patusan*（祭場）」（以下、祭場）の空間範囲を確立させていた。月桃には魔除けの機能があり、祭場の神聖性が保証されるとされていた。

2) 耳射ち祭の観光化

耳射ち祭の空間構造が、伝統を維持している場合と観光化している場合において、大きな相違が生じることが明らかとなり、それは集落間での耳射ち祭の意味に違いを生じさせている可能性がある。

耳射ち祭は前述したように、児童の無病息災を祈願し、祭礼の継承を行う機会である。しかしながら、観光化がすすむとともに、政策による助成等が行われるようになった耳射ち祭では、村長をはじめ、集落の有力者、議員や政治家といった外部からの来賓を接待するための機会ともなっていた。これらの対応のため、祭礼には貴賓席という従来にはなかった空間が設けられ、ブヌン族が貴賓席に向かって耳射ち祭を演じるという祭礼の劇場化が見られた。これは、祭場の神聖性が外的な政治の影響によって俗化されているとも解釈できる。一方で、従来の耳射ち祭は、ブヌン族社会内部での劇場化ともいえる現象があったかもしれない。

(3) 耳射ち祭の社会関係に関わる機能の変容

慣習的には耳射ち祭は父系氏族の成員によって実施されており、祭礼の内容の継承、狩猟採集の知識の伝承、そして、参加の可否による親族関係の再確認などが行われる機会となっていたが、観光化した耳射ち祭の集落では、祭礼の内容の継承という点に対して、集落から学校に変更されて行われるようになった。集落の子供らは学校教育を通して、耳射ち祭に関わる知識を得ていた。観光化した耳射ち祭の空間構造の変化と伴って、エンターテインメント的な要素が生じたことが伺えた。

(4) 集住化政策による耳射ち祭の地域化

慣習的には、氏族ごとに各自の祭場において耳射ち祭を行なっていたが、強制移住による集住化の結果、耳射ち祭が合同して行われるようになり、集落によっては耳射ち祭の観光化が見られた。これは、各氏族が継承してきた生態知識や耳射ち祭に関わる知識、耳射ち祭の祭礼の空間構造等が画一化する傾向が見られた。

今後の課題：

今回の調査では、耳射ち祭に関わる動植物の生態知識のデータを収集することが主要な目的であった。調査の結果からは、耳射ち祭のやりかた、それに関わる動植物の生態知識の運用が、従来は父系氏族ごとに継承されてきたのに対し、集住化以降は、父系氏族がまとまったかたちで行われるようになっていたことが明らかとなった。従来、父系氏族に固有な生態学的な知識が継承されてきたのに対し、新たに経験的に形成された知識が耳射ち祭にどのように関わっているのかが必ずしも明確にできなかった。今回の調査では、集落の耳射ち祭にだけ注目して調査を行なったが、知識の継承における基盤となってきた親族関係のありかたも同時に考える必要がある。今後の課題は、インフォーマントのもつ生態学的な知識がどのようなものなのかを明らかにするだけでなく、その背景にある親族関係をはじめとした社会関係を合わせて考えていく調査が求められる。

参考文献：

- 林仁瀚 2004 『南投縣布農族卡社群植物利用之研究』、屏東：國立屏東科技大學
- 曾清峰 2005 『南投縣布農族卓社群民族植物之研究：以卡度部落為例』、彰化：國立彰化師範大學
- 李曉櫻 2010 『布農族傳統體育之研究-以霧鹿集落射耳祭為例』桃園：國立體育大學
- 陳秀如 2016 『布農族射耳祭的沿革與族群意識的關係-以花蓮縣卓溪鄉為例』臺北：國立臺灣師範大學
- 張慧娟 2018 『布農族狩獵文化的現代意義：以獵人 Dahu Ispalidav 周孔志為例』、台南：國立台南大學
- 林修澈 2018 『台灣原住民族集落事典』、台北：原住民族委員會、697-707 頁
- 廖哲嘉 2019 『臺灣原住民布農族射耳祭形成、背景、儀式流程及發展現況之研究』臺北：臺北市立大學

●本事業について

2019 年度地域文化学専攻・比較文化専攻学生派遣事業によって、博士論文を執筆する上で必要となる一次資料を得るためのフィールド調査を実施することができた。この事業を通じて、報告者の研究をさらに一歩進捗させることができた。感謝いたします。